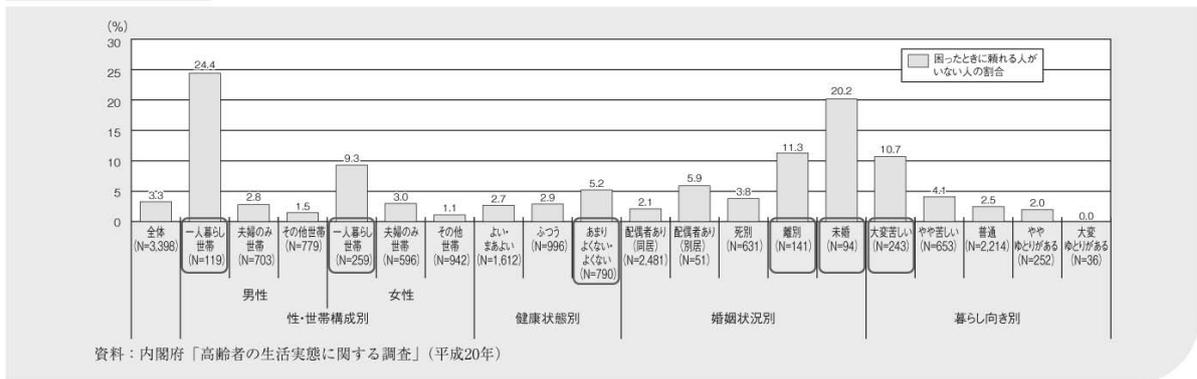


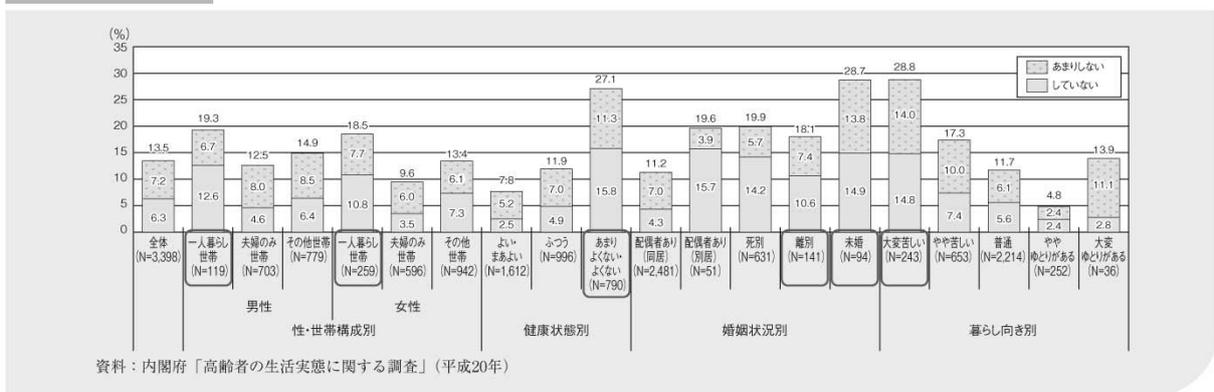
今年の白書のテーマのメインのところでございますけれども、社会的孤立に陥りやすい高齢者の特徴は何かということ进行分析しました。(図1-3-2)は、「困ったときに頼れる人がいない人」の割合というのを、例えば性別で見たり、婚姻状況別に見たものですが、世帯構成別に見るとやはり1人暮らしの方が困ったときに頼れる人がいないとする人の割合が高かったり、未婚の方とか、あとは暮らし向きがとても苦しい方がやはり困ったときに頼れる人がいないと思っていられるということがわかります。

図1-3-2 困ったときに頼れる人がいない人の割合



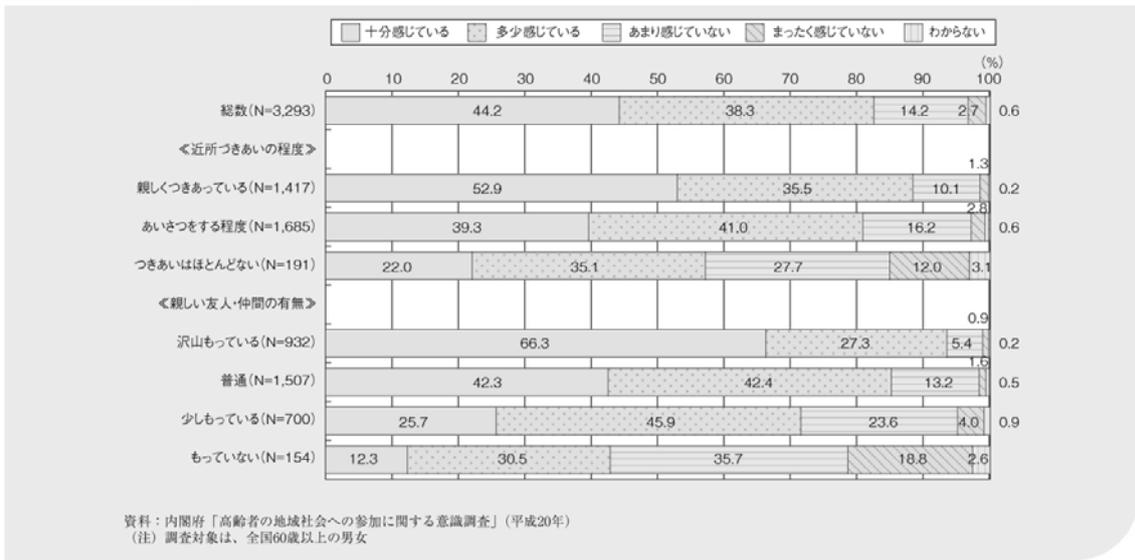
(図1-3-3)ですけど、1人暮らしの方や未婚の方、暮らし向きが大変苦しい方というのは、お友達の付き合いをあまりしていない状況がわかります。お友達との付き合いもあまりしていないこともあり、困ったときに頼る人もいないというふうな状況にあります。

図1-3-3 友人との付き合いについて



恐らく生活が便利になったので、元気な間は特に地域の方と交流しなくても、また家族が離れて暮らして家族の人とも交流しなくても生活が成り立つんだと思うのですが、健康上の理由で何かあったときなどいざとなったときに頼れる人がいないというふうな事態が、昔よりは生じやすくなっているのかなという感じがいたします。社会的孤立が生み出す問題なんですけれども、やはり孤立感のある人は生きがいが低くなっているということがあると思います。(図1-3-7)ですけども、ご高齢の方に「生きがいを感じていますか」と訊いたときに「十分感じている」「多少感じている」人を合わせると、8割の人が、生きがいがある、感じていると回答しています。

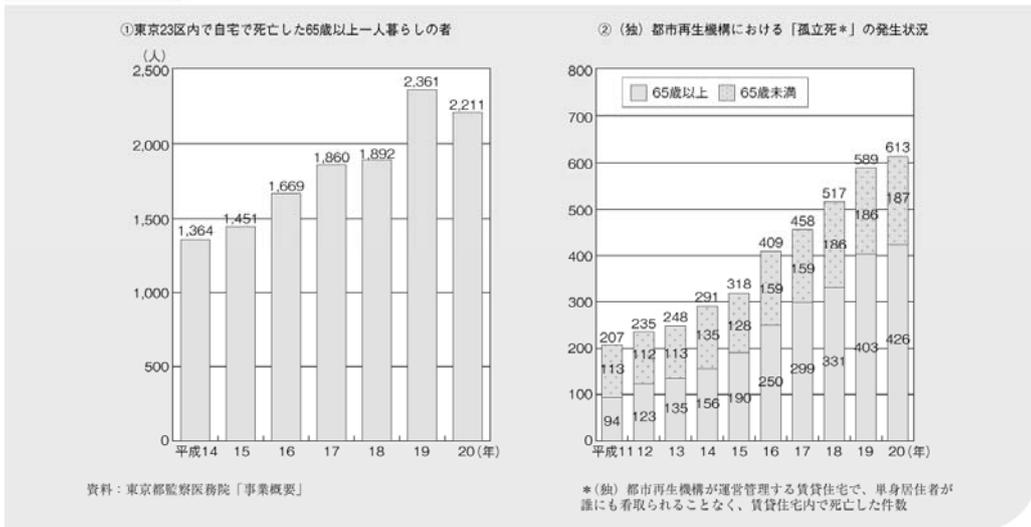
図1-3-7 近所づきあいの程度別/友人の有無別生きがいの有無



近所づきあいほとんどないという方になりますと、22.0に35.1を足して、ほとんど6割の方が生きがいを感じていますが、やはりさっきの8割の方に比べると、ご近所づきあいがいない人が生きがいを感じている割合は下がりますし、親しいお友達がいらない方になりますと、その一番下ですけれども、12.3と30.5を足しますと、これは4割の方しか生きがいは感じられないというふうなことでございます。

(図1-3-9)です。東京23区内の自宅で死亡した65歳以上の1人暮らしの方の数ということで、これは増加傾向にあります。孤立死という定義はないのですが、孤立死と言われるものも増加をしているんじゃないかなと、このグラフから推測をされます。

図1-3-9 孤立死の発生状況



それで (図1-3-14) をご覧ください。